

『同志社大学英語英文学研究』25 (1980年9月)

書 評

福田 恆 存 著

「私の英国史—空しき王冠—」

宮 井 敏

「さあこうなれば、どっかと大地に腰をおろして、王たちの哀れな最後を物語ろうではないか——玉座を追われた王、いくさに倒れた王、追出した王の亡霊にとりつかれた王、王妃に毒殺された王、寝ている間に殺された王、いづれの王も非業の死を遂げたのだ。やがては朽ち果てる王たちのこめかみを締めつけるあの『空しき王冠』の中にはいつも死神がおのが宮廷を構えているのだ。」

Royal Shakespeare 劇団の associate director, John Barton が上記『リチャード二世』からの引用をプロローグに掲げて, “an Entertainment by and about the Kings and Queens of England” と銘打って朗読劇 *The Hollow Crown* を発表したのは1961年のことであつた。初演は同年3月19日, ロンドンの Aldwych Theatre の Royal Shakespeare Company の出演によるものであつたが, 翌1962年には上演台本が Samuel French, George G. Harrap Co., から76ページの小冊子として出版された。サブ・タイトルに Music, Poetry, Speeches, Letters and other writings from the chronicles, from Plays and in the Monarch's own words, devised by John Barton とあるように, これは十一世紀のウィリアム征服王から十九世紀のヴィクトリア女王にいたる歴代33人の王と5人の女王の姿を, 彼等の日記, 手紙や年代記, 当時の民謡, 人々の寸評, 後世の評価などを巧みにつなぎ合

せて描き出す、と云う構成をとっている。

この Declamation Drama は一種の新しい朗読劇を目指したもので、きわめて簡素な装置を使って、男優3名、女優1名と歌手兼ギタリスト1名のかけ合いだけで話をすすめてゆくものであるが、一切の無駄を排してただ俳優たちのエロキューションと身振り、手振り、顔の表情のみによって進行させてゆくやり方は内容の卓抜さもあって意外に好評を博し、同劇団の有力レパトリーとして定着した。一方、慢性的な赤字に悩む R.S.C. が Royal Shakespeare Theatre の百年祭をきっかけとして世界各国の演劇ファンにあてて、総額百万ポンドにのぼる大々的な寄付金集めを行なう事となり、その一環として同劇団が「仕込み」のかからないこの *The Hollow Crown* と、同趣旨の朗読劇 *Pleasure and Repentance* の二つをひっさげて四度目の日本公演を行なう事になり、昭和五十年十月来日し、東京、札幌、名古屋、神戸で交互に公演を行なった。一般の日本人には比較的馴染みのうすいイギリスの王、女王の物語であり、又原語のままの公演であったにもかかわらず、巧みな構成と流れるような緩急自在のエロキューションは二時間余という時間の経過を忘れさせるものがあり、各地で絶賛を博した。福田恆存氏は本書あとがきの中で、「イギリスの歴史を殆ど知らない他国人にこの作品の面白さが通じる訳はない。日本での公演も当然失敗した」と断じたが、高橋康也、谷川俊太郎、倉橋健、諸氏の各紙劇評にも過褒の言葉があり、又同年10月18日の神戸公演で見る限り超満員の観客の反応は非常なものがあつた。

時代がかった四脚の椅子と、テーブルの上におかれた王冠と赤いバラ一輪以外は何もない簡素な舞台で四人の俳優と一人の歌手が時に立ち時に坐って台本を朗読すると云うだけの事なのであるが、一人が朗読し始めると他の連中も共に科白を追い、それぞれの表情で反応を示す絶妙のアンサンブルが装置と衣裳のないドラマとして完璧の舞台をつくり上げていた。たとえば、のちに Victoria 女王と結婚する事になる Prince Albert が自作のバラードをギターの手奏で、“Sound of transport, sounds of lore” とうたうと、ヴィ

クトリアに扮する Sara Kestelman はうっとり目を閉じて聞きほれるが、時々はっとなって身づくろいをし、女王らしい威厳を取り戻そうとする。他の三人の男優はヴィクトリア朝の紳士らしく、時にわざとらしく咳払いをし、時に神妙に耳を傾け、歌が終るとほっとしてあくびをかみ殺す、と云うわけである。そしてこのあと18歳のヴィクトリア女王自身の日記にある戴冠式の模様が Sara によって些か退屈で空虚な感じを出して延々と進められてゆく。

或は Jane Austin が15歳の時に書いた偏見にみちた王たちの寸評のなかで “[Mary Tudor] would be succeeded by that disgrace to humanity,” (と口をゆがめて、さも憎さげに語り) “that pest to Society,” (つよく) “Elizabeth!” とののしると思わず客席からどっと笑いが湧きおこる。ジョージ三世が “Was there,” (と一息入れて) “such awful stuff as great part of Shakespeare?” (にやりと笑って) “Only one must not say so.” と呟くとあちこちからくすくす笑ひがおこったりするのである。

公演の思わぬ成功は五人の俳優の卓抜な演技と、英語という言語のリズミカルな特性を巧みに生かした朗読もさる事ながら、さまざまなテキストからの抜萃の仕方、配列の妙にもよるものであろうが、何よりも全体の構成の背後に光る作者 John Barton の冷徹な史眼が観客に語りかけて来るからであろう。冒頭に掲げたリチャード二世のせりふにもあるような戦死した王、毒殺された王、憶病な王、愚かな王、誇り高い女王がことごとく痛烈な批判の矢面に立たされて、その残忍さ、軽薄さ、無能、好色、失政が容赦なく攻撃されるが、さりとて王制廃止を主張するでもなく、反体制を絶叫するでもなく、まことにクールな突き放した眼で「王冠のむなしさ」と人間の夢さをユーモラスに描き出て人間としての王者のもろさ、弱さを見事に浮かび上らせている。このテーマの為にはこの形式しか考えられなかったと思われるのである。

日本でも昨春の木下順二作「子午線の祀り」の大成功以来、新らしい紋事

詩劇の誕生がしきりと叫ばれている。それは「山本安英の会」が長年の実験と訓練を積み重ねて来た「群読」²の成果の上に立つものであり、天台声明の流れを汲む平家琵琶の語りとは全く異質の、歯切れのよい日本語の朗読劇を新しく誕生せしめた点で、その功績は過少評価を許さぬものがある。けれども、それはそれとして一体この木下朗読劇で日本の歴代天皇の人間像の展覧会が果して可能であるだろうか。「空しき勅語」とか、「うつろなる玉座」とかと銘打って、さまざまな天皇の人間の側面を浮き彫りにする試みが、およそ空想にもせよ可能だろうか。もし不可能だとすればそれは何故か、John Barton の悠々たる余祐とユーモアがまことに羨ましく感じられる事である。

さて、Barton は朗読劇 *The Hollow Crown* の成功に力を得て、1971年に至ってこの上演台本に更に手を加え、Joy Law と共に *The Hollow Crown, The Follies, Foibles and Faces of the Kings and Queens of England* と題して Hamish Hamilton から出版した。日本では福田逸氏が翻訳を試み、『歴史と人物』誌上に連載され、昭和五十年一月号から一ケ年、エリザベス女王篇までが発表された。今般各号に付けられていた父、福田恒存氏の英国史解題が増補されて一本となり、これに上記「空しき王冠」のうちウィリアム征服王からチャールズ二世までの邦訳が巻末に付せられて、『私の英国史一空しき王冠』³として本年六月世に出るに到ったのである。従って『歴史と人物』誌に連載中は「空しき王冠」が主であり、福田氏の解説が従であったが、単行本となるに及んで父子の立場が逆転して、増補解説が9章に分れて「私の英国史」本篇となり、翻訳部分「空しき王冠」がその参考資料としてこれを補う形となったのである。

「私の」英国史とした理由は、あとがきにもあるように著者が「独断でも良いから自分に納得のできる」英国史を書いてみたいと考えたからであり、又それは英国のための英国史ではなく、「現代日本のための英国史」を意図したものであると云う。従って、それは「英国史」とは云い条、「英国通史」

ではなくてアングロ・サクソン時代からチャールズ一世までのイギリス史であり、「空しき王冠—イングランドの王・女王たちの愚かさ、弱さ、人間的表情の陳列」の方も、これに合せてチャールズ二世に関するハリファックス侯のコメントまでとなり、それ以降ヴィクトリア女王までが割愛された。

このため、本篇・附録ともにまことに中途半端なものとなる結果となった。今もし「現代日本のための英国史」と云うのならばエリザベス王朝までの歴史よりはむしろ清教徒革命以後の部分のほうがはるかに教訓と示唆に富んでいると見るのが常識ではなからうか。また、イギリスの王、女王たちの人間的側面を日本に紹介すると云うのならば、原作のもつみごとな語り口は伝えるべくもないにせよ、ともかく John Barton 作 *The Hollow Crown* を忠実に「全訳」すべきであつたであろう。ステージの上でのあまりにもみごとなエロキューションとアンサンブルは到底書物の読者に伝達不能ではあるうが、それはすべての外国のドラマの翻訳には不可避のことであるだろうからある。下司の勘ぐりだが、沙翁学者福田恆存先生としては、或はエリザベス王朝以後のイギリス史にはあまり興味をお持ちになれなかったのかも知れない。

ところで、著者の目的は「英国史の基調音」を明らかにすることにあると云う。それが「宗教的には英国国教という鶏的なものを生み、道徳的には愛国心と利己心との妥協によって個人の自由を確保し、政治的には中央集権的指導力と民主主義とを融合させ、心情的には国家主義と国際主義とを両立させる事によって、ヨーロッパのどの国よりも先に近代国家」を誕生せしめた原動力であると云うのである。例えばウィリアム征服王が時の教皇グレゴリウス七世の妨害を押切つて聖・俗裁判所の機能分化を行なった事が後世テューダー王朝において教皇から完全独立した王権を確立出来た遠因であるとか、ヘンリー二世の御世に農業への関心から封建騎士達が市民化した事が封建諸侯の力を削ぐ結果を生んだ、或はリチャード獅子心王の長期の海外遠征はかえって地方自治と都市の自立をもたらした、などという解釈が随所に散見す

る。その一つ一つについて格別の異存はないが、問題はその一つ一つがすべて国家の近代化という大目的に奉仕しているとするその史観にある。ケムブリッジ学派を代表する歴史家、H・バターフィールドは云う。「現在に眼を注いでいる人間はえてして『宗教的自由はどうして起って来たか』と云った問題を提出する。そしてえてしてそれを『宗教的自由が獲得出来たについて我々は誰に感謝すべきか』という問題にすりかえてしまうのである」⁴と。たしかに歴史研究の場合、過去を現在との関連において研究するという事は意味のある事であり又、或程度は避けられない事ではある。だが危険は過去を現在と関連づけるその程度の強さにある。「近代化」を至高善とする前提に立って歴史を見ればすべての歴史敘述に一つの型を強要する事になり、すべての歴史上の人物を単純に進歩を促したものとそれを妨害したものの二つに分類してしまう事になる。その結果歴史全体が現在という時点に美しく収斂する一つの体系にまとめ上げられてしまう、と云うのである。

福田史学の場合、強力な中央集権国家の形成は即ち能率的で合理的な近代化への捷徑であり、それを阻害するものは前近代的な封建諸侯の反動的姿勢である、と云う二極構造の図式が全篇を通じて貫かれている。それは、「真に賢明な軍事的中央集権化」とか、「近代的な国家権力の形成に障碍となる封建諸侯の特権」、「イングランドの近代的中央集権国家への道を著しく阻害した封建的毒素」、「強力な中央政府を求めるサクソン・イングランドの現実主義とは正反対の野蛮で空想的な無政府主義的傾向」などと云った表現に如実に示されている。一方の側には近代的合理化を推進める国家的善があり、反対の極には「時の非可逆性」に挑む非理性的衝動がある、という図式である。

この観点からすれば、エドワード一世のブリテン島国家の統一は専制君主の恣意的な領土的野心、強権による侵略という側面よりも、結果としてこの統一のもたらすメリットのみが評価される事になる。スコットランドの民族的英雄、反英運動の旗手ウォレスは「民衆の味方、革新的愛国者」ではなく

て、近代化の敵であり、英蘇両国は彼の抵抗を圧殺してでも、「後に実現するように一つの国家として一つの王冠を載く事によって外敵に備える」のが最良のやり方であり、もしそうならそれをステュアート朝まで待たずにこの時代を実現しておいた方が遥かに得だったと云うのである。また、アイルランドについても、「この島は英国民にとっては他国と云うよりは軽蔑すべき蛮族にすぎない」し、「自ら内政の諸制度を整える意志と能力に欠けていた」が、「それだけに却って屈し易く、イングランドにとってはむしろ好都合であった」とされるのである。

1381年の農民一揆についても同様の観察が下される。黒死病の結果としての労働人口の激減と賃金の高騰の対策として出された賃金凍結令は、インフレ抑制策として時の政府の正しい方針として出されたにもかかわらず民衆はこれを理解せず、サボタージュの挙に出、これを無視したため、その代りとして1379年人頭税を課して人々の富を吸上げようとしたが民衆は再びこれを拒否、ついに大暴動となった、とのべられている。「アダムが耕し、イヴが紡いでいた」原始キリスト教に憧れていたこれら農民達よりも、「王は忽論、領主や地主の方がまだしも進歩的であった」と云う訳であるが、ここでも、百年戦争のための軍事費調達、そのための人頭税と云う視点が欠落しており、労働市場における売り手市場を契機としての農奴解放という重要な側面が見落されているとおもわれる。

要するに、「失政者を悪玉扱いにし、それに対する反乱者を善玉扱いにしたり、又、前者を保守的、後者を進歩的と断定したりする事は出来ない」と云うのであり、それは「中央集権と民主主義とが両立し相俟って発達する国柄」だからとされるが、「国王の利己的な権力欲は必然的に中央集権を指向する」が、同時に「それに抗議する貴族や聖職者の利己的な権力欲が抬頭し、それが民主主義の基盤となるから」と云うくだりになると些か首をかしげざるを得なくなる。農民一揆はよいでしょう。権力欲からする有力貴族の王に対する反逆が民主主義の基盤となりうるだろうか。国民不在の宮廷革命

がブルジョワ革命ほどにも意味をもつだろうか。ヘンリー・ボリングブルックがリチャード二世から、グロスター公がエドワード五世から、ヘンリー・チューダーがリチャード三世からそれぞれ王位を奪ったのはいずれも有力貴族が王に逆って王となるケースであり、こうした権力構造内部の内ゲバは民主主義の発生とは所詮無縁のものでしかなかったであろう。

いづれにせよ、著者の云う「英国史の基調音」は、愛国心と利己心との妥協によって、中央集権的指導力と民主主義の融合によって、国家主義と国際主義の両立によって得られる史的エネルギーだとされるのであるが、それは妥協、融合、両立から生れるというよりはむしろ、これらの対立物のきびしい相剋を経て弁証法的に醸成される driving force に外ならない。複雑きわまりない現在の全体をつくり出したものは、複雑な運動、錯綜した問題、入り組んだ相互作用をもつ過去の全体であり⁵、その全体に対してイギリス人が理知的適応と本能的適応⁶を交互に行なって来た結果が眼前のイギリス史であろうと考えるのである。

瑕瑾であろうが以下二、三気付いた点をあげておきたい。27ページにウィリアム征服王の長男ロバート（仏名ロベール）とあるがこれ以後、「兄のロバート」、「ノルマンディ公ロベール」、「ロバート」、「兄ロバート（ノルマンディ公）」、「長兄ロベール」、「長兄のノルマンディ公ロベール」とあり、いづれかに表記を統一する方が初学者には理解し易からうとおもわれる。

また、第三章第三節冒頭に「ヘンリー二世は長男の死後、次男のヘンリーに戴冠式を行なわせ、ル・ジューン（青年王）と呼ばせ、ルイ七世の王女マルグリットを娶せる事によってフランス王位の継承をもくろんだ云々」という箇所があるが、これは前節末尾の「長男が夭折した後、次男に戴冠式を行なわせ、アンリ・ル・ジューンと呼ばせ云々」と云うのと文意が重複している。

18ページの「エセルレッド無計画王（リードレス）」はふつうは“Ethelred Unræd”か“Ethelred the Resourceless”のどちらかであり、148ページ

「特別評議府（プライヴィ・カウンスル）」は「privi kaunsil」, 187ページ
「拿捕私船の特許状」は「私掠免状」ではなかろうか。

116, 117ページ記載のバラ戦争関係図は類書に例を見ない精密なものであり、とりわけシェクスピア史劇との関係を示す符号はきわめて有益で教えられるところが多かったが、「○△はそれぞれ同一人物」とある符号のうち、△印が三つあり、マーチ伯ロジャー・モーティマーの娘アンがヨーク公エドマンドの息ケンブリッジ伯リチャードに嫁いで同一人物とされるのはわかるが系図中央下段サマセット伯ボーフォートの娘マーガレットとは別人であるので、その△印は不要のものであるとおもわれる。

注

1. William Shakespeare, *Richard II* Act III Sc II, 試訳
2. 例えば昭46・3月大阪毎日ホールでの公演。
3. 中央公論社昭55・6月
4. H・バターフィールド著越智他訳『ウィッグ史観批判』未来社26ページ。
5. 同上書28ページ。
6. ルイ・カザミヤン著手塚・石川訳『近代英国』創文社歴史学叢書、「序論」。